『授手印』（『昭和新訂三巻書』授菩薩戒儀』三〇頁）にその横堅の三心を定義するいわれが述べられている。法然上人の言葉であると前置きしたあと、例えば三心のうち、至誠心を発（おこ）したとき深心・回向発願心を具すように、一心を具せれば残りの二心は必ず具わると言う。また別に、『観経』や『観経疏』に三心を別々に解釈しているのは往生の心に三種の心がありそれを発すことを教え、念仏の行者が虚仮心を発したとき至誠心をもって治すことを教え、疑惑の心が起きたときは深心をもって治すことを教え、往生を願うものはすでになした善をもって往生の願とすることを教えたものであるとする。ここで前者を横の三心と言い、一心に三心を具するのを言う。後者を堅の三心と言い三心を別々に置くことを言う。

『念仏名義集』巻中（『浄全』十、三七三頁上）に、横の三心の根拠となった法然の言葉が常に仰せられていたとして述べられている。三心を簡単に具える方法として決定往生しようとする心に、誠の心を至さんと教える至誠心も、念仏を一脈に決定往生を願う回向発願心も皆納まると言う。

さらに、『西宗要』の「第十一　三心具足文事」（『浄全』十、一六二頁上）に次のように説かれている。

横の三心とは至誠心の真実の念仏往生の行を始めこれを行じれば深心も回向発願心も至誠

心に具するを言う。なぜ至誠心に他の二心が具するかというと善導の教えによれば、南無阿弥陀仏というのは『浄土三部経』に命終（みょうじゅう）のとき決定往生する行であると説かれており、それによって一向専修の身となるからであると言う。同様に一向に信じるから深心中にも至誠心・回向発願心があり、また回向発願心中にも別の心があるわけではなく善導の、真実深心中に回向して往生することを願うのを回向発願心と言う、との文を引き説明している。

これによって、『阿弥陀経』には一心不乱と言い『往生論』には世尊我一心と言う、としている。

このように聖光は、横の三心によって法然では明確とは言えなかった『観経』の三心と『阿弥陀経』の一心を結び付けたのである。法然は行具の三心で『観経』の三心と『無量寿経』の本願の三心を結び付け、聖光は横の三心でさらに『阿弥陀経』の一心とを結び付け、ここに『浄土三部経』の心が一致したと言える。

第五項　安心の広略

さらに聖光は付け加えて、『阿弥陀経』と『往生論』の一心を略説、『観経』の三心を広略として安心の広略を分別している（『浄全』十、一六三頁上）。

なぜ『阿弥陀経』では一心かと言えば『阿弥陀経』に説かれるときはすでに往生のための